2022年2月20日 川越教会

丸山　勉

前を向く信仰

［マルコによる福音書9章20～29節]

人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

1. あきらめない者たち

聖書の中には、一度聞いたら深い印象を残す言葉が多くありますけれども、今日の9章24節の言葉もその一つだと思います。―「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」 思わず語った言葉ですが、とても真実な言葉だと思います。

これは一人の父親の、主イエスに向けられた言葉です。大変な苦しみを抱えていた人です。自分のことと言うよりも息子の病気のことでずっと苦しんでいました。この息子が何才か不明ですが、聖書によると霊に取り付かれ、ひどいてんかんのような症状になり、息子は一体どうなってしまうのかと、何度もお手上げ状態になったことがあったに違いありません。けれどもこの父親は諦めていないのです。ですからイエス様に何とかして頂きたいと切望したのだと思います。何週間か前に礼拝で読みました7章のシリア・フェニキアの女性（異邦人であるギリシア人）も「小犬でも食卓から落ちるパン屑は頂きます」とイエス様に食らい付いて諦めない女性でした。聖書にはそのように「求める」者たちが多く登場してきます。求めることによって、或いは見出されることによって主イエス様と出会い、その生涯が変えられた者たちのことは聖書に沢山証言されています。

1. なぜ弟子たちは癒しを行うことが出来なかったのか

この父親は、イエスが今近くにおられるようだと聞いたのでしょう。しかし、イエス様はこの前の箇所では山の上におられ、その麓ではイエス様の弟子たちがおりました。父親はどうもまずその弟子たちを見つけ、癒してくれるように願ったようです。周りには大勢の群衆や律法学者たちもいたようです。殆ど野次馬のような状態でしょうか。でも親は必死だったと思います。そこにイエス様が山から降りて来られました。15節から19節まで読んでみますとこうあります。

「群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、群衆の中のある者が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれてものが言えません。霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」

弟子たちはこの子供を癒すことが出来なかったのです。28節以下で弟子たちはイエス様に「なぜ私たちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねます。イエス様は「祈りによらなければ、決して追い出すことは出来ない」と言われました。どういう意味でしょう。弟子たちも既に癒しの権能を主から与えられています。ということは、弟子たちも祈っていない筈はないのです。17節ではイエス様は「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか」とさえ仰るのです。厳しい言葉です。弟子たちも何故ここまで言われてしまうのだろうといぶかしく思ったと思います。イエス様の真意は私にもよく分かりませんが、少し想像してみました。もしかしたらこういうことも言えるのではないかと思いました。

　大勢の群衆たちに囲まれて、この子を癒そうとした時、「自分」が主人公のようになっていたということは無かっただろうか。私はイエス様の弟子としてお墨付きを貰った者だ、自分の信心の強さでこの子を癒してあげよう、と。もとより「信仰」というのは自分を誇ることではありませんよね。イエス様の力に信頼することだと思います。自分自身を明け渡すことです。そうでないと、まるでこの男の子はマジックショーの材料のようになってしまいます。マジックショーで称えられるのはマジシャンですよね。しかし癒しにおいて本当に大事にされなければいけないのは誰かと言えば、当然、その苦しんている当人です。その人が解放されることです。私たちがもし神がかった存在になりたいのだと思ったら、神様はやはり「なんと不信仰なのだ」と言われると思います。神様のこと・イエス様のことが分かればわかるほど、私たちは驕ることが消えていく筈なのだと思います。ですからイエス様は「これは祈りによならければ出来ない」と言われたのだと思いました。「自分」の思いではなく、神様に占領して頂くのです。

1. イエス様にまるごと預ける信仰

そのことをよく表してくれているのがこの20節以下の物語ではないでしょうか。―「人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」

　「その子の父親はすぐに叫んだ」。イエス様が心の内に迫ってきたからですね。アタマじゃない。心が動いた。思わず叫んだ言葉は「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」でした。先週、弟子ペトロの信仰告白の言葉を聞きました。それは「あなたはメシアです」（8:29）でした。模範解答です。あなたこそ救い主。これはクリスチャンになる時の信仰告白の原型だと申しました。けれども、その信仰告白の心というのは、内実はこの父親の叫びではないでしょうか。「信じます。信仰のないわたしをお助けください」。―イエス様の前に引き出され、立たされる時に、私たちは自分の不信仰、自分の弱さを見つめさせられるのです。

この父親も、今、苦悩や弱さ、欠けを持つあるがままの人間としてイエス様の前に立たされたのです。その際、お行儀のよい言葉は不要です。「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助け下さい」。この父親の言葉の背後には、これまでの運命論的諦めや、やるせない悲しみが秘められているようにも思います。しかし主の前に立ちながら「もしおできになるのなら」という言葉は、それこそ不信仰なのです。主が私たちに語りかけられる時にはそのような言葉などは不要です。今、主イエスはこの父親、いや一人の神様に造られた苦悩した人間に真剣に真向かっておられます。そして父親も主に真向かっている！この人はこのイエスの言葉と眼差しに触れた時に、もう自分自身をイエス様に預けたのです。「もしできれば」という、前に進めない足踏みではなく、「信じます」と、前に向かってイエス様に、弱さや不信仰も抱える丸ごとの自分自身を預けたのです。そしてそれ自体が大きな癒しでした。まず、この父親が癒されたのです。イエス様の招きと言葉によって。そして、それにつづく事柄として、この子供の癒しも起こったのです。「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われる」（使徒言行録16:31）。「神の国」支配が現前に展開したのですね。

私が東京バプテスト神学校に通っていた時、説教学などを教えて下さった内藤淳一郎先生が、今日のこの箇所のメッセージでこのような言葉を残されています。

「信仰は、主イエスが近づき、語り、迫られる時、これに反射して魂が応えることである。父親は、もはや願いを叶えてもらう信仰ではなく、主の言葉に強く迫られて、「信じます」と告白した」と。

また「主イエスの言葉に応えて「信じます」と告白し、「お助けください」と祈る時、主は私たちをあらゆる混乱から救い、神のご支配を現される。」と。

本当にそうだと思います。主は、私たちをどこまでも探されるお方です。苦しんでいる私たち、またなかなか自我のこだわりから自由になれない私たちに、「重荷を負うているものはわたしのもとに来なさい。あなたを休ませてあげよう」（マタイ11:28）と招いて下さっています。出来上がった人間だからではなく、私たちは罪人だから、十字架の主を仰いで信仰に生きるのです。

「信じます。信仰のないわたしをお助けください」。

お祈り致します。

主よ、今日のみ言葉を感謝致します。どうぞ私たちの中に、あなたに全く信頼する信仰をお与え下さい。「誰でも幼子のようにならなければ神の国に入ることは出来ない」とあなたは言われました。どうか、あるがままの私として、前に向かって、あなたの懐の中に大胆に飛び込んでいくことが出来ますように。何度も何度もあなたの大きな愛と慈しみの中に立ち帰っていく信仰をお与え下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。